

を有することでも有名です。教員数は約280名、学生数は約8700名です。

それでは、私が所属しておりました言語文学部日本語学科についてお話しします。教員数は3名、内、日本語専攻1名、日本近現代文学専攻2名、そして日本人教員数は3名です。学生数は約800名、1年次は約200名、4年次になると約50名に減少します。

学生の必須科目としては週1時間が文学史、週10時間が日本語の授業です。専門科目としては、3年次と4年次の学生向けに、以下のような授業があります。翻訳、言語学、作品鑑賞です。

大学院では各自の専門分野に応じて個別に指導が行なわれます。大学院生には3年間、奨学金を得る機会があります。それを日本に渡航する費用に充てる場合が多くあります。また、日本に留学するには、日本政府、すなわち文部省による奨学金を得ることができます。なお、昨年11月に学習院大学との間に教員および学生の交流協定が締結されました。今後はこうしたプロジェクトをさらに促進していく予定です。

次に図書資料等の整備状況についてお話しします。図書館は学部図書館のみで各学科の図書館はありません。したがって専門的な図書資料は充実していません。

最後に学会組織についてです。イタリアでは日本学全般に関する学会、すなわち大会が、年1回開催されて、近年、日本語学関係の学会も開催されるようになりました。また、ローマで発行される学術誌 *Il Giappone* (日本) に論文を投稿する機会があります。

質疑応答

問：中村祥子（台湾：輔仁大学）

先ほど方先生から、台湾の日本語教育の現状、日本語研究の現状についてお話がありまして、今同じ職場にいる者、あるいは同じ台湾にいる者としてちょっと悩んでいるんですけども、あんまり暗い話題ばかり言うてはいけないので、少し明るい話題を二つほど報告したいと思っております。今、「哈日族」という言葉、日本かぶれとか、日本のミーハーというような中高生を中心にした現象が起こっているんですけども、最近、台湾での日本語教育というのが、大学を中心としたものから中学・高校の第二外国語として設けられるようになりました。確か3年だったと思うんですけども、正式に行われるようになって、大体週二時間程度、クラブ活動、課外授業として行われております。で、大学の日本語を専攻した学生たちがその教師になるという道も1つ出てきております。

それから、台湾で大体どんなことを研究されているのかということで、詳しくは言えないんですけど、今台湾は国際会議、国際学会というのが大変流行しておりまして、この2、3年で行われましたこの種の学会について、2、3御報告申し上げたいと思っております。

近年に行われた文学関係のものでは「21世紀への日本語・日本文学研究」、それから日本学関係では「日本学・日本文化の総合的研究」という、台湾文学、日本の宗教、日台の宗教の交流史、それから日本語教育、これは日韓台三カ国の日本語教育の現状についての報告がありました。

それから日本語教育に関して、先ほど言いました高校の日本語教育ということで、中等教育における日本語教育の現状、及び問題点を討議する会議がありました。これは、日台韓、それからオーストラリアで、報告の中ではドイツもございました。

それから、今年の四月に行われたんですけども、華人圏（Chinese と言えはいいんでしょうか）「華人圏の日本語教材及び日本語教育の検討会」というものが行われました。今、台湾では専門の日本語教育、日本語学科に携わっている先生の専門のものをそれぞれ発表するという形でした。ドイツでも、日本とのネットワーク、つながりはあるけれども、横のつながりがなかなかないということをおっしゃっていたんですけど、それが現状です。

もう一つ、明るい話題として、最近日本の学者との共同研究というのが行われていて、方先生も台湾の言語学、日本語学の先生方と一緒になさっていたと思うんですけど、そのあたりをちょっと明るい話題として、お話しただけならありがたいなと思っているんですが…。「絶滅に瀕した言語」を、お願い致します。

答：方美麗

確か、その研究プロジェクトの計画を立てまして、まだ通っていないと思いますが、政治大学の吉田妙子先生という方と、東呉大学というかなり伝統のある大学の塩入すみ先生という方と、東海大学の黄淑燕先生という方と、私という形をとって、「危機に瀕している植民時代の台湾における日本語（language in danger）」という調査（research）をやっています。つまり、日本の植民地時代、台湾で行われていた日本語教育、国語教育の指導を受けた者は、日本語は母国語というか、母語といってもいいくらい教育されましたが、今はもう歳になって、日本語もかなり揺れてきて、台湾の政治変化、時代の変化とともにすたれて、もう瀕死の状態だということです。

で、それを社会言語学からどういうふうに見ればいいのか、どういうふうに調査すればいいのか、そういう提案を、日本の宮島先生という方が台湾にいらっしゃった時に、こういう社会現象、社会言語の調査が大変大事だということを教えていただいて、なんとか、その消えつつある植民地言語の日本語の使い方を記録し、これからの世代の学術的な研究に残して、社会現象、言語現象のなかに位置付けられたらいいなという形で、「台湾の国科会」というところに申請を出したんです。

でも、通らなかったと思います。日本の文部省とかそれ以外でも、是非協力して頂いて調査してみたいです。以上です。

意見：林綺雲（台湾：政治大学）

台湾の日本語教育は、私の考えでは、飛躍中だと思います。

先ほど方さんがおっしゃいました「哈日族」は確かに最近できた一つの現象だと思います。また確かに、植民地時代を生きてきた日本語教師たちは、古い日本語を教えていました。「いました」と過去形を使ったのは、日本語を母語にしている日本語教師はもう70代なので、だいたい教壇から退いているのが現状です。今、大学あるいは私立の日本語学校の日本語教師は、日本で修士をとって帰ってきている40代が活躍しています。私ももう50代、あと少しで古い人間になってしまうのが現状です。

台湾の日本語教育は、戦後、とざされていた時期がありました。しかし、1980年以降は、かなり開かれてオープンになってきました。台湾の大学、国立私立あわせて約七十校ある中の、半分以上

に日本語コースが設けられているということからわかるように、台湾で日本語教育はかなり盛んになっております。

確かに、教師の質、どれから教材の開発も、これからは課題になってくると思います。

問：スザンネ・西村シェアマン (明治大学)

ジョン・グリーンさんにお伺いしたいんですが、イギリスでは日本研究がいつから行われていましたか。また、いつまでに遡りますか。

答：ジョン・グリーン

戦前にも既に少しばかりの日本研究があったらしいですが、やはり戦争が主なきっかけで、オックスフォード研究所、SOAS 日本研究所で始められました。戦争勃発で国が情報部のような人たちの日本語教育を、非常に重視して、力を入れていたわけです。